

# 『新約聖書』のキリスト論

— ジェームズ・デニーと対話しつつ —

松浦義夫

## 第一章 キリスト論に関する二つの疑問

ジェームズ・デニーが神学者として活躍していた時代、すなわち十九世紀の終わりから二十世紀の初めにかけての時代は、『新約聖書』のキリスト論を巡って様々な論議がなされた時代である。そのような論議を踏まえたうえで、いわば彼のキリスト論の集大成ともいふべき、『イエスと福音』を著したわけである。この著作のなかには、今日の我々も耳を傾けるべき多くの示唆が含まれている。そして今日二十世紀も終わろうとしている時代において、再び同じような現象、すなわち『新約聖書』のキリスト論を巡る活発な論議のなされるという現象が生じているわけである。そのような今日の時点に立って、ジェームズ・デニーの研究

を、それ以後今日までになされた様々な研究成果を考慮したうえで、再検討することは、意義のあることのように考えられる。そして、この『イエスと福音』のなかでジェームズ・デニーが語りかけている事柄を通して、今日の視点に立って彼と対話し、さらに今日の我々の受け継ぐべき『新約聖書』のキリスト論を探求することが、筆者の課題でもあり願いでもあるわけである。

ところでジェームズ・デニーは、『新約聖書』のキリスト論を議論するに先立ち、そもそも『新約聖書』という書物とはどういうものなのか、ということに関する事柄から彼の『イエスと福音』を書き始めるのである。そこで、彼の言葉によって『新約聖書』とはどういう書物なのかということを見ていくことにする。

「我々が『新約聖書』を開くと、我々は光を放つような生き生きとした宗教生活の真っ只中に足を踏み入れたように感じられる。世界に、これに匹敵するような生き生きとした生活や、あるいはそのような現象を証言するような文書集成の例は、他には認められない。同時代の文学においては、浅薄さと悲惨に捕らわれているような魂が、ここではあたかも霊的祝福の大海原に乗り出しているかのようである。完璧な宗教生活にとって備えられているべきどのような条件も、ここでは欠如していない。すなわち、確信、動機、悔い改め、理想、召命、勝利への確信というような事柄である。そして徹頭徹尾、そのどの部分においても、どの面においても、またどの要素においても、この宗教生活は、キリストによって決定されているのである。その性格は、そのどの点においても、彼の性格を帯びている。そこに見られる確信とは、彼に対する確信である。そこに見られる希望とは、彼自身が呼び起こし、実現させるのも彼であるような希望である。そこに見られる理想は、彼の教えと彼の生涯から生まれたものである。そこにある力は、彼の霊の力である。我々が一言でこれを信仰と呼ぶなら、彼を通しての神に対する信仰である。すなわち、その信仰のなかに認められ

るあらゆる性格が、彼自身の性格を譲り受けたものであるような信仰である。そしてこの性格のゆえに、人類によって信仰という名で知られている事柄からは、區別することのできるような信仰である」。(註二)

以上引用した言葉は、ジェームズ・デニーも認めているように、キリスト教会の伝統のうちには育った者たちが、自分自身の目で『新約聖書』を読むときに受ける、いわば第一印象とも呼ぶべき事柄を述べたものである。そして今この事柄を最も単純に表現しようとするれば、次のようになるであろう。すなわち、『新約聖書』において示されている型でのキリスト教とは、イエス・キリストを信仰の対象とする信仰形態である、ということである。この信仰生活においては、総べての事柄がキリストに対する信仰によって決定される、ということなのである。このように受け止められたキリストとは、正に超越的な偉大さを持った人物である。しかし、彼はまた歴史上実際に存在した、一人の人物、現実の人物でもあるわけである。『新約聖書』に描かれている彼の姿は、この現実性を帯びた姿で示されているのである。この現実の人物が『新約聖書』のキリスト論の源泉でもあり、キリスト者にとっての信仰と生活の源泉でもあるわけである。繰り返して表現すれ

ば、以上のような事柄が、『新約聖書』を読むときに受ける第一印象といえよう。しかしこのような第一印象には、二つの疑問が提起されるのである。そして、ジェームズ・デニーが彼の著書である『イエスと福音』のなかで取り組んでいるのが、正にこの二つの疑問なのである。

それでは、その二つの疑問とは具体的にはどのような事柄なのであろうか。まず第一の疑問とは、先ほど記述したような『新約聖書』に関する事柄が、どの程度まで正確なのか、という点である。すなわち、『新約聖書』によって提示されている型でのキリスト教あるいはキリスト教的信仰生活が、真実イエスという一人の歴史上実在した人物を、先ほど記述したような位置に置いているのかということである。さらにこの生活においては、一切の事柄が、特に神と人間との関係に関わる一切の事柄が、このイエスという一人の人物によって決定されているということが、果たして真実と言えるのかどうか、ということである。さらに言葉を換えて表現すれば、歴史的に「キリスト教」という形態で存在し続けている信仰の源泉とされる『新約聖書』においては、キリストは常に信仰の対象とされてきたのであり、キリストを単に我々が生きていくため

の手本とするような信仰の形態は決して存在しなかったというようなことが、果たして真実と言えるのかどうか、ということである。この第一の疑問に対して、肯定の返答をするとして、そこでただちに提起されるのが第二の疑問である。

第二の疑問とは、次のようなものである。すなわち、『新約聖書』に提示されている形態としてのキリスト教は、イエスという一人の歴史上の人物を自身の「主」とした人々によって書かれたものである。このような信仰的内容の事柄は、はたしてイエス自身が意図した事柄なのか、ということである。言葉を換えて表現すると、キリスト者たちがキリストに対して抱いている思いが、はたしてキリスト自身が自分自身に対して抱いていた思いと整合性を持っているのかどうかということである。世界にあって、キリスト教的信仰として知られるようになった事柄、すなわちイエスの最初の弟子たちの時代以来受け継がれてきた信仰が、はたしてイエス自身がそのようなものを生み出すために、生きそして死んでいったような事柄であるのか、ということである。たとえ『新約聖書』を生み出した初代教会のキリスト者たちであっても、彼らの心と世界においてイエス自身が占めていたような位置を、イエス自

身は彼らに対して要求したのかどうかということである。イエス自身に訴えかけることによって、彼らの信仰は正当なものと評価されるのかどうか、ということなのである。今日の我々には、特に宗教改革以後主張されているように、教会の伝統として暗黙の了解を受けていることも、『新約聖書』に訴えて評価し、果たしてそれが初代教会以来の伝統なのかということを吟味することに馴染んでいるわけであるが、その初代教会の信仰、具体的には『新約聖書』を生み出すことになった信仰自体も、イエス自身に訴えることにより吟味することが必要ではないのか、という疑問である。

これら二つの疑問は、それぞれに重要な意味を持っている。第一の疑問すなわち『新約聖書』が我々に対して与える第一印象が、より厳密な調査によって真実であるかどうかが実証されるのかどうかを探索することとは、言葉を変えていえば、今日キリスト教会において保持されている信仰が、初代教会すなわち、『新約聖書』を生み出した人々の信仰にまで溯り得るものなのかどうかを探索する、ということなのである。すなわち、今日の教会は、『新約聖書』においてキリスト教の信仰であると証言されている事柄を、正しく理解しているのかどうか、ということである。ジェームズ・

デニーが彼の『イエスと福音』を著した動機も、まさにこの事柄に関わっているのである。すなわち、今日の我々の信仰告白は、『新約聖書』の信仰を正しく受け継いだものか、という教会の自己吟味の課題を、この第一の疑問は我々に提示しているのである。そしてそれに続く第二の疑問は、果たしてこのような『新約聖書』の信仰は、イエス自身によって要求もされ肯定もされるものか、ということであり、さらに言えば、そのような『新約聖書』の信仰を受け継いでいると自負している今日の我々の信仰も、イエス自身によって要求もされ肯定もされているものなのかどうかという重要な、キリスト教会にとっては、正に生命線とも呼ぶべき問題なのである。したがってこれら二つの疑問は、かつてもそうであったように、今日においても、またこれからも、キリスト教会が存続しキリスト教信仰が存続する限り、常に急を要する調査課題なのである。

我々が取り扱おうとしている二つの疑問は、ある重要な点においてきわめて性格の異なったものである。第一の疑問は、ある意味できわめて単純なものである。すなわち、キリスト教会において過去から現在に至るまで、支配的であるキリスト教信仰のもっている概念

は、『新約聖書』自体によって生み出されたのかどうか、ということである。言葉を変えて言うと、現在我々によって知られており、歴史上においてもそのようなものとして知られ続けてきた型でのキリスト教的信仰とは、イエスを信仰の対象とするものであるが、このことがはたして初代教会においてもそうであったと言えるのか、ということである。後の教会においてイエスという一人の人物に与えたような、彼独自の位置を、『新約聖書』は全面的にイエスに対して与えているといえるのか、ということである。この疑問に答えるために、我々がなすべきことは、『新約聖書』自体に立ち返って、その証言を詳細に調査検討すればいいわけである。しかしながら、第二の疑問は、第一の疑問とは質を異にするものなのである。すなわち、ここにおいて難題が先鋭化されるのである。ここにおいては、一体イエスに関して如何なる事柄が、「歴史的」に認識できるのかということが前面に出てくるのである。『新約聖書』は、イエスをキリストまた「主」として受け入れた人々によって書かれたものであり、そこには純粹に客観的な姿でイエスが描かれているわけではないのである。そうすると、道は二つに一つということになる。つまり『新約聖書』を生み出した人々の信

仰を、そのまま受け入れるというやり方と、もう一つは、それでも出来るだけ「歴史的」な真実に対して一歩でもより近づこうとするやり方である。ジェームズ・デニー自身が目指した方向は、もちろん後者のような道である。それは、既に記したように、初代教会の信仰といえども、イエス自身の要求もし肯定もした信仰であるかどうかということが、今日の我々自身の信仰自体と深く関わってくるからなのである。すなわち、第二の疑問も我々にとっては、生命線に関わるまさに実存的問題なのである。この疑問に答えることが、果たして可能なかということになるのだが、このことに対しては、ジェームズ・デニーの次のような言葉に、注目したいと思うわけである。

彼は、『イエスと福音』における記述を進めるに当たり、次のようなことを心がけたと語っている。すなわち、「筆者は、自然の領域においても、あるいは歴史の領域においても何が一体可能なか、というような事柄に対して、アプリアリに決定論じみたことを言うことに対して不信の念を表明したい。宇宙といえただだ一つしかなく、自然が宇宙の総べてというわけではない。歴史にしても、同じことである。宇宙を離れては、自然にしる歴史にしる、一つの全体を形成して

いるわけではない。自然も歴史も、別個のものとして、離れて存在するわけではない。それらが徹頭徹尾生き生きとした関係に位置付けられているような、道徳的また精神的組織のなかに、それらは取り込まれているのである。そのような組織にあつては、何が一体自然科学的に、あるいは歴史学的に、考え得るのか否か、というような事柄については、誰も手放しにアプリアリに発言すべきではない。そのような可能性というよりな事柄は、我々の予想の及ばない事柄である、というよりは、我々の予想をはるかに超越しているという場合の方が、最もありそうなことなのである。経験というものが、こころの堅固さよりも心の弾力性を要求するとしても、それほど驚く必要もないであろう。世の中に確かなことがあるとしたら、それは、世界はどんな科学の物差しによつても、哲学の物差しによつても、それに合うように作られているわけではなく、哲学や科学に対して、絶え間なく再構築をせまるような、ある尺度に基づいて作られているのである、ということである」<sup>(註三)</sup>、という一人の人物を調査するに際しても、ジェームズ・デニーのこの言葉を常に思い起こすようにしたい、と願わずにはおれないのである。

## 第二章 『新約聖書』によって提示されているキリスト教

これまで述べてきたのは、次のようなことである。すなわち、『新約聖書』において我々が出会うのは、総べての事柄がキリストという一人の人物によって決定されるような信仰生活であるということ、さらには、このことが果たして真実かどうかということが、我々の考察すべき疑問であるということである。言葉を換えて言えば、『新約聖書』のキリスト教ないしキリスト論というような事柄が、存在するのだろうかということである。すなわち、『新約聖書』においては、それ独自の統一性を持った精神的現象が存在するのかということである。またその統一性そのものが、キリストに対して、キリスト者たち総べてが抱いている心的態度によつて構成されているのだろうか、ということである。

ジェームズ・デニーは、このような疑問に対する、教会の伝統的答へと、いわゆる批判的研究の課題とを比較しつつ、この間の事情をわかりやすく纏めてくれているので、彼の言葉を引用することにする。

「キリスト教の信仰に囲まれて育てられたような人々

にとつては、『新約聖書』のキリスト教とは、一つの首尾一貫した事柄であるということに、疑いを抱くようなことはありえない。すなわち、彼らは、『新約聖書』の中に、全体を貫いて流れている、共通の信仰、すなわちイエスに対して総べての名に勝る名があたえられているような信仰の存在を認識しているのである。このような、『新約聖書』の統一性に対する、本能的ともいえる確信は、その統一性に平行するように常に付き従っている、最も鋭い意味での相違点というものの存在によつても、決して乱されることはないのである。これに対して、批判的研究は、この相違点を識別するということを課題とするような研究方法なのである。そして『新約聖書』の批判的研究と呼ばれるものによつて、今日までに為されてきている仕事の大部分は、かつては全く同じ形態で同じ水平線上に並ぶ事柄というように思い込まれていた事柄の中に存在する、相違点を浮き彫りにするということに関係している。『新約聖書神学』という学問、もしそれを学問というならばの話であるが、この学問によつて今日までに為されてきたのは、キリスト教の最も初期の教えを、相互に比較することによつて、様々な類型として規定分類したことである。それによつて我々が教えられてき

たのは、単に『使徒的』というような曖昧な概念の中に埋没させるのではなく、ペテロとパウロ、ヤコブとヨハネを、きつちりと區別するということである。勿論専門の研究者でない読者であっても、このような區別をするべきであることは、気がついているわけである。しかし、彼らは、無理やりにそのような區別を強いるというような誘惑に駆られることもないのである。彼らも、『ガラテア人への手紙』や『ローマ人への手紙』に見られるような弁証法的論議が、直感的で沈思黙考するよなヨハネの書簡とは、根源的に相違していることは、認識しているのである。彼らが、『ヘブル人への手紙』や『第四福音書』の最初の数行を読めば、今までとは違う、また何か新しい知的雰囲気の中に、足を踏み入れていることに気付くことだろう。ここで彼らが呼吸している空気は、『マタイによる福音書』、『マルコによる福音書』あるいは『ルカによる福音書』において味わたつたのとは、別の空気であるのに気がつくであろう。ドイツにおいて「宗教史的方法」として知られている、例のいわゆる新しい研究方法によると、『新約聖書』のキリスト教も、宗教的混交の最上の例と見做され、比較宗教学の助けを借りて、その中の要素の総べてのものを、それぞれ独立した元の資料にま

で跡付けされるが、勿論この研究方法にとっては、キリスト教というものは、いわば一つの流れのようなものであり、その流れの源泉に最も近い所に存在するのがイエスである。しかしその流れが世の中に流れ出すにしたがって、あらゆる方向から様々な支流がこれに流れ込み、増水され、色付けされ、時にはその水の中に、毒が混ぜられてしまったものというようになる。このような事柄の起こされた経過は、我々がおそらくはそう信じるようにと教えられているように、真実な信仰を我々が絶えず再興するための基準として、『新約聖書』というものを持つために、『新約聖書』が纏められ閉じられた時から始まったのではなく、もう最初から既に始まっているということになる。すなわち『新約聖書』それ自体が、このような経過の起こったことに対する、最も初期の証言といえるのである。もし我々があえてキリスト教を純粹で汚れの無い状態で保持したいと望むならば、そもそも浄化されるべき対象は、『新約聖書』それ自体なのである。例を挙げれば、我々がパウロの『コリント人への第一の手紙』に見出す聖餐重視主義といったものや、また『使徒行伝』や『牧会書簡』に見出す、発生当時のカトリック主義というもの、さらには何らかの型において、教

会とか聖職者たちと結びつけられるような、宗教的唯物主義といったものは、総べてこのような線に沿って説明されなければならないし、またその価値を割り引いて考えなければならぬ。もしそれぞれの要素が、キリスト自身にまで溯ることができないとするならば、そのような要素は言葉の厳密な意味においては、キリスト教的なものとはいえないことになる。もしそれらの要素がほか他の源泉にまで溯ることができるとなると、その源泉を我々が突き止めることができれば、その事柄自体を理解することができ、その事柄の眞の価値というものを評価することができ、その事柄の眞の価値の研究方法に関して、ただ今のところは、敢えて議論する必要はないであろう。この研究方法の持っている正当性は、いまや疑問の余地の無いものである。そして総べて新しい事柄というものが、いつもそうであるように、この研究方法は、ある種の人々の頭脳を陶酔させてしまうような力を持っているのである。しかしそれと同時に、この研究方法は『新約聖書』の中にある、いくつかの闇に包まれた不可解な箇所に対して、光を当てるといような作用をなしてきたし、これからもより多くの成果をもたらしてくれることは、確実と言えよう。今問題にすべき点は、この研究方法が、

『新約聖書』に内在するある種の相違点を、殊更に強調しすぎることである。しかもその相違点たるや、この研究方法による主張に従えば、キリスト教の根本的な真実とは真っ向から矛盾するものである、というのである。

『新約聖書』には、統一性とともに、多様性が内在しているという事実に対しては、あえて誰も異を唱えるものは居ないであろうことは、認めてもよかる。統一性というものが利益を受けるのは、かえって多様性が存在するときである。統一性の持つ現実性と力とは、同時に持っている多様性の幅に正比例するのである。このような多様性を、共通の生命の持つ勢力の中に、しっかりと纏め上げ保持することのできるような統一性とは、なんと力強いものであることかと、我々は感じるのである。『新約聖書』を特徴付ける、打ち消しがたい相違点を実証される度に掲げられる疑問とは、それらの相違点を総べて従えてなお勝ち誇っているような、力に溢れる勢力とは、一体何ものなのかということである。これらの証言者がこんなにも多彩でありながら、お互いの相違点を貫いて、兄弟の絆を形成し、解きがたい霊的絆で結ばれていることを認識させるほどに力強くしかも根源的に一つであるのは、

一体何によるのであろうか。彼らを一つに結びつけているのは、キリストに対する共通の関係である。すなわち彼についての共通の宗教的確信を含む、彼に対する信仰であることは、全く疑う余地の無い事柄である。<sup>1)</sup>

以上の引用からも理解できるように、ジェームズ・デニーは、いわゆる批判的研究方法の持つ真理契機を認めつつも、殊更に強調される『新約聖書』の相違点というものに、疑問を投げかけているのである。すなわち、それらは「相違点」というよりも「多様性」と受け取るべきであるというのが、彼の主張であることになる。そして、今日の我々も耳を傾けるべき点は、そのような多様性を纏め上げている「統一性」の力強さ、という点である。すなわち多様性があるからこそ統一性が生きてくる、という主張である。そして、この『新約聖書』における、多様性と統一性は、常にキリストを中心として巡っているのである。すなわち、『新約聖書』における様々な証言の間に、いかに大きな相違点というようなものが存在したとしても、そこにおいて提示されているのは、総べての事柄がキリストによって規定されている信仰生活である、ということである。特に神と人間との関係においては、どのよ

うな事柄も、キリストをキリストとして信仰の対象として信じることに寄り掛かっていると見える、ということなのである。『新約聖書』において、キリスト教として認識されているのは、そこにおいてはキリストが彼独自の位置を占めており、その位置は絶対的な重要性を持ったものであり、この重要性は他のどこにおいても類似するものさえ存在しないほどのものなのであるが、このような絶対的な重要性を持った位置をキリストだけに与えているようなキリスト教なのである。ジェームズ・デニーは、このように『新約聖書』によって提示されているキリスト教というものを、印象深い表現によって要約し、さらに続いて具体的に『新約聖書』の証言に即して、このことを立証しようと試みているわけである。

### 第三章 初代教会の教説におけるキリスト

ジェームズ・デニーは、『新約聖書』に登場する証言者たちの描くキリストを調査するに際して、最も初期のキリスト論が内包されている可能性のある、『使徒行伝』に描かれているペテロの説教を、まず最初に取り上げている。勿論『使徒行伝』は、『ルカによる

福音書』の著者と同一人物の著した、初代教会の成立と発展の記録ということになっており、そのなかに描かれているペテロの説教も、著者自身の視点から描かれたものといえるのであるが、その背後には初代教会の教説がペテロの説教という型で伝承された可能性を認め、調査を始めることにしているわけである。ここで注目すべき点は、キリスト教会にはそもそもその初めから、何らかの意味で「キリスト論」が事実存在したということである。イエスが弟子たちと共にあった当時、彼によって彼らに投げかけられた問い、すなわち、「あなたたちは、私を何ものかというのか」という問いは、彼らが自らに引き受けなければならない問いであったのである。最初のキリスト論とは、まさにこのイエス自身の問いに対する彼らの答えなのである。このイエスの問いかけは、『福音書』の記述に従えば、フィリポ・カイザリアにおいて為されたものであるとなっているが、その歴史性は留保するとしても、何らかの意味でイエスの弟子たちに投げかけられた問いであった、ということは確かなことであろう。さらに注目すべきは、この問いに答えるのはペテロであるということである。すなわち、初代教会のいわば公式表明というようなのは、ペテロが代表して行うという形

式を採用しているということである。したがってこの『使徒行伝』におけるペテロの説教も、初代教会を代表してなされたものというように考えるべきであり、いわばキリスト教会の最初のキリスト論が語られている、というように考えて差し支えないと言えよう。そして、只今の時点での我々の疑問は、果たして初代教会の人々が、このイエスの問いに対して、正当な答えを与えたのかどうか、と云うような事柄ではなく、彼らが実際に、どのように答えたのかと云う事柄なのである。

『使徒行伝』の記述に従うと、イエスの弟子たちとイエスの関係は、最終的には、イエスの復活とイエスによる聖霊の授与と云う出来事に依存しているのである。無論これらの出来事は、ある意味においては歴史を超越している事柄といえるかもしれないが、これらの出来事が、彼らの経験の範囲を超えた所において起こったわけではないのである。ペテロは復活のイエスと出会い、聖霊を授与されたというような表現によって言い表されるべき経験をしたのである。この経験のゆえに、彼の信仰と生活のなかに置いてイエスの占める位置は、唯一イエスのみが占めるべき位置を占めることになったのである。このイエスは、「主」である

と同時に「キリスト」であり、この使徒の信仰の世界においては、イエスによって決定されないような事柄は、何も存在しなくなったのである。我々が提示しようとしているのは、言葉の厳密な意味においては、「ペテロのキリスト論」というよりは、むしろイエスの持っている、このような信仰者の世界におけるイエスの意義というようなものである。使徒ペテロは、自らの説教を、歴史的人物であるイエスについての事柄から語り始める。そして自らの言葉を確認するため、聞き手たちに対して、次のように訴えかける。

「あなたたち自身が知っているように、ナザレのイエスは、神により認められた方である。そのことは、神が彼を通してあなたたちに対して行われた、数々の奇跡や力ある業またしるしによっても明らかである」(『使徒行伝』二章二二節)。ここでペテロの言っている「数々の奇跡や力ある業またしるし」というものが、ペテロ自身に対して持っている意義と云うような事柄は、厳密には規定できないけれども、それによって、「神により認められた方」という表現は、幾らか幅のある表現であり、イエスがこれらの業によってメシアであることが証明されたというように、必ずしも受け取れない表現である。実際問題として、このような

最も初期のキリスト教信仰を特徴付けるのは、イエスがキリストであったという信仰、すなわち過去の事柄ではなく、イエスがキリストであると信じる信仰、すなわち現在に属する事柄なのである。すなわちここでペテロがいわんとしているのは、イエスが地上にいた時から、総べての人々が観るして認識したように、その言葉と行いにおいて示された能力のゆえに、神により認められた方であったのであり、そして今や、イエスは使徒たちによる宣教によって宣言されている人物、すなわち「主にしてキリスト」である、ということなのである。すなわちこのペテロの説教のなかで語られているのは、彼ら使徒たちのキリスト信仰が、イエスの歴史的生涯と切り離されたものではないということなのである。ユダの欠けた後の位置を補給する人物として、残された十一使徒と連帯して復活の出来事の証人となるべく選ばれる人物としての条件は、「主イエスが我々と行動を共にされていた期間、すなわちヨハネによるバプテスマの時に始まり、主が我々のもとより離れ天に引き上げられた時に至るまで、常に我々と行動を共にしてきた」(『使徒行伝』一章二一節以下)ということであった。復活のとき以来、歴史的人物イエスは、実際的には信仰上の理想的人物としてのキリ

ストによってとって代わられたというようなことは、的外れである。信仰のキリストこそ史的イエスなのであり、また史的イエスこそ彼らが信じたキリストなのである。したがって、史的イエスと面識を持つための十分な機会を持った者でない限り、キリストに関する証言をする者としての資格を認められなかったわけである。しかし実際問題としては、このようなイエスが地上において語ったり行ったりした事柄の重要性にもかかわらず、イエスがキリストであると証言され宣言されるのは、そのような事柄だけを、あるいはそのような事柄を主要な根拠として、そのことに基づいてなされているのではないのである。すなわち言葉を換えて表現すれば、イエスが「主にしてキリスト」であると宣言される基盤となっている事柄は、イエスが神の右に挙げられ、さらに彼らに聖霊を賜物として授与したという出来事なのである。すなわちイエスが本来あるべき姿の存在として認識され、またキリスト教という宗教において信仰の対象として彼にふさわしい位置を占める所以は、このような「高擧」及び「聖霊の授与」と呼ばれる事柄のなかに存在するのである。(以下次号に続く)

注

- (1) James Denney, *Jesus and the Gospel* (New York: A. C. Armstrong & Son, 1909), p. 1.
- (1) *ibid.*, p. 6.
- (11) *ibid.*, pp. 9-11.